

セミさまクッキング！

貫咲賢希

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

セミ様が頑張るだけのお話。

セミさまクッキング！

目

次

セミさまクラッキング！

「ふむ」

空中庭園の王の間。その玉座にてただ独り座る“赤”的アサシンのことセミラミスは暇を持て余した。

先程まで同じ“赤”的サーヴァントであるライダーと彼女たちのマスターであるシリウとの遊びの殺し合いを観戦していたが、今は一人でここにいる。

ここに来る直前にライダーが“余計な事”を言つたせいで、先程まで彼女の気分は良くなかったが、いまはなにもすることがないせいか、ひどく虚しい。

敵の襲撃はまだ先。自分に今やるべきことも特にない。

さて、いかにしてこの空虚の間を埋めるべきか？

そこで、ふつと、アサシンは思い浮かべる。

そういえば、我がマスターであるシリウ。あの大英雄であるライダーと戯れとはいへ、先程まで立ち合っていた。表面はいつものように飄々としていたものの、息切れしていた。

そう思うと、余計に何故かあの莫迦^{ライダー}に苛立ちを募らせ舌打ちするが、それよりも今は

マスターであるシロウだ。

恐らくかなりの疲労をしているだろう。彼はマスターであると同時にサーヴァントであるが、その身は受肉しているもの。人間に限りなく近く、しかも脳筋野郎達とは違ひ、強靭な身体能力を有しているわけでもない。団太いかも知れないが、見栄を張つているだけで脆弱に近い。シロウから言い出したこととはいえ、万が一彼の身に何かあつたらどうするつもりなのだ。

自分が想像する以上に疲弊しているかも知れない、そう考えた途端、彼女はその美貌を歪ませる。

敵の襲撃まではまだまだ時間はあるものの、マスターである彼がそれまでに万全な状態に戻らないかも知れない。もちろん、そんな愚行をするほど彼は馬鹿ではないこともアサシンは知っている。信頼している。だが、万が一のもしもだ。

勿論、仮にその方が一の状況になろうとも、この空中庭園では自分に敵う相手などいない。シロウに指一本触れさせないことだって可能だ。

だが、それでもマスターであるシロウが万全の状態であるのは好ましいだろう。
さて、どうする？

あれは適当に睡眠をとり、まともに休息をとろうともしない。前に自分が膝枕をしたときも全然嬉しそうではなかつた。今もわざわざ存在するだけで疲れる役立たずの様

キヤスタ

2 セミさまクッキング!

子を見るなど気苦労を背負つてゐる。

休めと言つても無駄だろう。彼は眞面目だから何かしら仕事に励むはずだ。そこはとても褒めても良い点だとアサシンも思うが、そんなこと言つては埒が明かない。となると、アサシン自ら動くしかない。女帝である自分が動くのは面倒だが仕方ない。

では、どう動くか？

魔術で回復する？ できなくはないが、自分が得意なのは黒魔術。呪う、傷つけるは得意だが、専門ではない。

では、それ以外での外部供給はどうだろうか？ そう例えれば――

「いやいやいやいや！」

考えた瞬間、アサシンは思考を打ち切つた。仮にその場で誰かがいれば、いきなり顔を真っ赤にして狼狽する彼女の姿を見て眉を寄せただろう。

「そ、それはまだ早いと言うか、驕ましいと言うか、別にアレとは同盟を組んでいるだけだし、そもそも逆に疲れるし――」

アサシンは俯き、まるで誰かに言い訳するかのようになつぱつ何かを言つてゐる。頬

が少し赤いのは見間違ひではないだろう。

「む？ 外部供給？ おお！」

と、なにか閃いたのかアサシンは顔を上げる。
善は急げ。さつそく彼女は行動に移した。

「いきなり呼び出しどは、いつたい何のようでしようか?」

シロウは突然アサシンから念話で「來い」と命じられた。

なんの用かと訊ねたのだが、いいから來い、としか返つてこなかつた。
敵襲でもなにかのトラブルでもなさそうだ。

詫の分からないま、仕方なくシロウは彼女に指定された場所に向かう。
「おや? これは?」

指定された場所に向かうにつれて、なにやら「匂い」が鼻を刺激した。

「おお、來たか!」

到着すると胸を張つてシロウを出迎えるアサシンがいた。

ここは空中庭園の食堂。

天井には煌びやかなシャンデリア。赤いカーペットの上には細かい刺繡が施された
白いクロスを敷いてある丸いテーブルに向かい合わせになつている二つの椅子。

そして、テーブルの上に火が灯されたローソクと共にるのは数々の料理だった。
その料理があまりにもこの場に似つかわしくない。

食堂なのだから、料理があるのは必然。しかし、周りの景色とその料理はかみ合つていなかつた。

「これは貴女が作つたのですか？」

「当然であろう」

もしくはと思いながらも、予想通りの返答がアサシンからきた。

色々と言いたいことがあるのだが、シロウは到着してから最も疑問に感じていたことを彼女に聞いた。

「なぜ、日本食ですか？」

そう。ここに並ぶ料理の数々は全て日本食だつた。どこから材料を持つてきたのか肉じやがや山菜や魚介類のてんぷら。ご丁寧にみそ汁と炊きたての白米まで準備してある。

「なに、お主は今まで教会におつたのであろう？　ならば故郷の料理など早々食す機会がないと思つてな。

お主のことだ。どうせ普段から口クなものを食べていいのであろう？

最後の晩餐などと縁起悪いものではないが、これで精々銳気を養うが良い」
どうやら、アサシンは自分のために料理を作つてくれたようだ。

いきなり何故？　などと再び質問をすれば、途端彼女の機嫌もそろそろ悪くなるだろ

う。アサシンはシロウが速く食べないのかと、今か今かと椅子と彼を交互にチラチラ見ている。

シロウは苦笑を浮かべながら、席につく。

ここで一番警戒すべきとは、あの毒で有名な女帝セミラミスが作った料理だ。常人であれば何か盛られてないかと疑うところなのだが。

「いただきます」

シロウは両手を合わせてから、置いてあつた箸を手にして料理を取る。

そこに一切に怖じ気も感じさせない。

シロウはアサシンに絆され、無条件に信仰しているわけではない。

しかし、ここで自分に毒を盛つても彼女にメリットがないと理解もしており、ゆえに警戒を一切せず、どんな思惑かは解らないが態々自分のために料理を作った彼女に感謝しながら箸をとつた。

取つたのは肉じゃがのジャガイモ。生前、自分がまだ天草四郎時貞だった頃、まだこのような料理は日本にはなかつた。だが、それでも、香りだけで、どこか懐かしさを感じる。

そして、口の中にいれて、何度も咀嚼する。

「ど、どうだ？」

普段のアサシンからは想像できないような何処か不安げな問いかけにシロウは穏やかに答える。

「とても美味しいですよ」

「！」

アサシンは少し驚いた顔をして、やがて見る見る内にその表情を綻ばせてる。

「そうか？ そうか。 そうだろうとも！ なにせ、この我が作ったのだからな！」

「しかし、以外ですね。失礼ですが、料理ができるとは思えませんでした。しかも、日本食を作れるとは」

料理を眺めながらシロウが言うと、アサシンは少しだけ不満そうな顔になる。

「料理など毒作りや黒魔術と基本は一緒だ。手順さえ確りしておれば、一度も作った事ないものでもできるに決まつておろう」

「毒作りと一緒にされると微妙ですが、美味しいのは事実です」

美味しい、その一言だけでアサシンは不思議と気分が高揚する。

シロウは再び箸を進めようとして、その動きがピタリと止まつた。

「む？ まさか、もういらぬのか？」

「いえ。貴女は一緒に食べられないのかと思いまして」

「我か？ 気にするな。お主が全部食べればよい」

「では、私からお願ひします。一人で食べるよりも二人で食べるほうが美味しいので、貴女もご一緒にしましょう」

「しかし――」

アサシンは恥ずかしそうに俯き、なにかごによごによ..

「なにか問題でも？」

「いや、日本食の作法を私は知らぬ」

途端、シロウは吹き出して笑つた。

「な、なにを笑う！」

「失礼。いえ、淑女である貴女が礼儀作法を気にするのは当然ですね。」

ならば、食事をしながら私がお教えしましょう。それなら構いませんか？」

「う、うむ。それなら良いだろう」

そうやつてアサシンは反対側の椅子にちょこんと座る。

「では、改めてしましょう。私に真似てやつてみてください」

「う、うむ」

「では、こう両手を合わせて、いただきます」

「いただきます」

そして、二人の食事が始まつた、その時だつた。

「なんだ？ 良い匂いがすると思つたら二人だけで食事か？」

「おおおお！ 人知れず場所で戦前の蜜月。まるで小説の一ページのようだ」

「…………」

「どこから現われたのかライダー、キヤスター、それにランサーまでぞろぞろとやつて来た。」

キヤスターはともかく、ライダーとランサーはサーヴァントとして常人に外れた嗅覚もある。それで嗅ぎつけてきたのだろう。

「お、お主たちはどこから！」

「ああん？ なんだよ、二人つきりで食事なんて水臭いじやねえか」

「誰もお主たちなど呼んでおらぬわ！ つて、あああああ！ ライダー！ なに、勝手に喰つっているのだ！ それは我がシロウに作つたのに！」

「アンタが作つたのか？ まあ、毒がないみたいだし大丈夫だな。というか、手作りなんて随分可愛いことするじやないか、女帝さんよ」

「黙れ！ ええい、シロウもなにか言え！」

「ライダー。手づかみなんて行儀が悪いですよ」

「そういう事を言えと言つてる訳じやないわ！」

「ほうほう、これはマスターの故郷の食事ですか？　これは中々の未知。吾輩、創作意欲が湧いてきましたぞ。次の新作は料理でもテーマにしましょうか」

「…………」

「お前たちも勝手に食べるな！　というか、ランサー！　無言で物凄い勢いで喰うのを止めろ！　シロウの分がなくなる！」

「俺は槍にすぎない」

「今この状況と関係あるのかそれは!?」

「まあまあ、アサシンも落ち着いて。仕方ありませんから皆で食事しましょう」

「くうう！　かくなる上は、ほれ、シロウもどんどん食べろ！」

「おいおい、見ろよ！　あーん、だぜ。女帝さんのあーん、だ！」

「いちいち騒ぐな！　小童共かお主たちは！」

「はははは…………」

かくして、喧嘩を撒き散らしながらも、賑やかな食卓を“赤”的サーヴァントたちは囲むことになつた。

・
とある某所。

「なぜだろう？　何故か除け者にされた気がしたぞ？」